

現代若年層ジュバ・アラビア語についての予備的報告

仲尾周一郎

1 はじめに

1.1 本稿の目的

ジュバ・アラビア語 (Juba Arabic, 略号 JA) はアラビア語スーダン方言を語彙供給言語とする、部分的にクレオール化されたピジンであり、南部スーダンの首都ジュバを中心とするエクアトリア地域 (主に都市部) やスーダン共和国内外の南部スーダン人コミュニティで使用されるリンガフランカである (恐らく数百万人の話者を持つが、現時点では法規上、公的な地位は持たない)。本稿では、主に筆者の調査により得られたデータを元に、若年層の話す JA 変種の諸特徴を以下の 3 点から報告する。

- (1) . ジュバの現代若年層話者に見られる文法・語彙の変化
- . ジュバにおける若年層スラングの発達
- . ジュバ・アラビア語の脱クレオール化

では、若年層 JA に特徴的に見られる語彙や文法的要素のうち、筆者のインフォーマントである若年層 JA 話者が無意識的に使用しているもの、では同若年層話者が意識的に「スラング」であると認識している語彙や語形成を扱い、ではハルツームでの居住経験を持つ若年層話者 (2010 年時点で 10 代後半～30 代前半) の話すアラビア語変種について脱クレオール化の観点から考察する。～ はそれぞれ独立した言語現象であるが、密接な関係を持ち、特定の言語現象が上記のうちいずれのケースに当たるかは客観的に規定しにくい場合がある。また、本稿ではこれらの現象の背景にみられるアラビア語ハルツーム方言の影響を、その顕在的な威信の言語現象としての現れと考える注目する。



図 1：南部スーダン地図

1.2 ジュバ・アラビア語とハルツーム方言

スーダンで使用されるアラビア語変種は、文語である現代標準アラビア語(略号 MSA)、口語アラビア語スーダン方言 (北部スーダンで話されるアラビア語諸変種の総称)、ジュバ・アラビア語に大別することができる¹。このうち、アラビア語スーダン方言はさらに北部・中部・西部・東部の方言に大別される。スーダン共和国の首都で話されるハルツーム方言 (主にスーダン共和国の首都・ハルツームで使用される変種、略号 KA) は、このうち中部方言の下位方言に位置づけられるが、基本的にスーダン全域で、口語レベルで最も高い威信を持つ (Abu-Manga 2009)。

本稿ではジュバ・アラビア語 (JA)、ハルツーム方言 (KA)、現代標準アラビア語 (MSA)² のデータを提示するが、各変種の分節音に (2) の表記法を採る。

(2) スーダンで話されるアラビア語諸変種の分節音目録

MSA の分節音目録 (下点は軟口蓋化を表す)

/i, a, u, ī, ā, ū, ay, aw/

/b, f, m, w, t, d, θ, ð, s, z, n, l, r, ʔ, d, s, z, j, š, y, k, q, ɣ, ʁ, h, ʕ, ʔ, h/

KA の分節音目録 (cf. Dickins 2007, 下点は軟口蓋化を表す)

/i, a, u, ī, ē, ā, ō, ū, ay, aw, uy, iw/

/b, f, m, w, t, d, s, z, n, l, r, ʔ, d, s, z, ʔ, r, c, j [j], š [ʃ], ny [ɲ], y [j], k, g [g], ŋ, ɣ, ʁ, h, ʕ, ʔ, h/
(ny [ɲ] は単一の音素であるが、表記上 2 文字としている)

JA の分節音目録 (仲尾 2010 の記述を修正)

/i, e, a, o, u/ (長母音・二重母音等は認めない)

/p, b, f, v, m, w, t, d, s, z, n, l, r [r~r], c, j [j], š [ʃ], ny [ɲ], y [j], k, g [g], x, ŋ, ʔ, h/

なお、JA はピッチが弁別的であり、記号 ´ で H (high tone /1/)、記号 ^ にて F (falling tone /N/)、記号なしで L (low tone /J/) を示す (e.g. dé /de1/「これ」, bê /beV/「~もまた」, be /beJ/「~で」)。KA および MSA はストレスアクセントを持つが、その位置を記号 ' にて示す。KA で観察される、無アクセント語の語末音節にみられる H (high tone, Dickins 2007) を記号 ´ にて示す。

¹ それぞれ、相当の語彙を共有しているためある程度の相通性は認められるが、文法構造からはそれぞれ完全に異なる言語であると言える (系統関係としてはラテン語、フランス語、ハイチ・クレオールのものに近似している)。北部スーダンの西部に位置するダルフル地域、中部のヌバ地域、東部の青ナイル地域等では、非アラブ人の間のリングフランカとしてスーダン方言が話される。また、南部スーダンの北西部パハル=エル=ガザル地域や北東部の上ナイル地域では、ジュバ・アラビア語と、こうしたリングフランカ・スーダン方言との中間的な変種が話される (ピジンとはいえない) といわれるが、十分なデータは提示されていない。

² JA では MSA からの借用語は KA の音韻を経由して借用される。すなわち、MSA . /θ, ð, q/ は KA や JA では /s, z, k/ として実現する (MSA. θa'qāfa > KA. sa'kāfa > JA. sakáfa 「文化」)。

2 ジュバの若年層話者に見られる文法・語彙の変化

本稿の調査地であるジュバにおいては、壮年～老年層 JA 話者 (30 代後半～) によって、「子供 (若年層の JA 話者) 達は、こういう言い方をするが、この [ジュバ・] アラビア語は間違っている」「若者の使う言葉は聞いてもよく分からない」その表現は KA で、JA ではない！」との言説がしばしば聞かれる。こうした、壮年～老年層話者が若年層話者の話す変種に対して持つ違和感は、若年層の変種が伝統的な JA 変種とは異なる特徴を発達させていることに起因する。ただし、若年層の話す変種は一枚岩ではなく、話者自身の言語意識としては複雑な様相を呈する³。

本節ではまず、具体的な若年層変種の特徴のうち、若年層話者が無意識的に使用する語彙・文法的要素のうち、壮年～老年層話者の変種と異なるものを列挙する。ただし、若年層の話者はここで壮年～老年層の変種としたものを使用することも多く、これらは世代によって相補的に分布しているわけではない。以下略号 YJA (若年層の話す JA 変種)、OJA (壮年層～老年層の話す JA 変種) を使用する。

2.1 語彙の変化

典型的な YJA の特徴として話者自身が意識しやすいものに、語彙の変化がある。具体的には、(3) のように OJA と YJA において、それぞれの使用する内容語が意味的に一対一に対応しているもの (バリ語⁴ や MSA からの借用形式が顕著にみられる) と、(4) のように OJA が持たなかった意味的なカテゴリーを YJA が獲得した結果、使用する内容語が増加しているものがある。

(3) 借用による、一対一に対応する語彙の入れ替え

	OJA.	YJA.
蝶	farāša (KA. fa'rāša)	kapáparât~kafáfarêt (Bari. kapoportat)
蝙蝠	wadwād (KA. waṭ'wāt)	lókwiłili~lókúlúli (Bari. lukululi)
鷺	súgur (KA. 'sugur)	kúrikúri~kúri (Bari?)
バナナ	mûs (KA. 'mōz)	laboro~labolo (Bari. rabolo)
紙煙草	tába ⁵	sijára (MSA./KA. si'jāra)
病院	jibitáliya (KA. isbi'tāliya)	muštésfa (MSA./KA. mus'tašfā)
沢山	ketîr (KA. ka'tîr)	díp (英語 deep? cf. 註 15)

³ Mahmud (1983) 以降、JA はジュバの幼年層～若年層において母語として習得されていることが報告されている。こうしたクレオール化が YJA の変化の一因であると考えられる。

⁴ バリ語 (Bari) の形式は Spagnolo (1960) に基づく。バリ語については 3 節参照。

⁵ 恐らくスーダン西部方言起源と考えられる形式である (cf. ダルフル方言 *tāba* または *taba*, Philips 1983: 318)。なお、古い時代の KA の記録だと考えられる Amery (1905: 68), Hillelson (1925) は *sigāra* という形式を記録しているが、19 世紀末頃に JA と分岐したと考えられているアラビア語系クレオール、ヌビ語では *sigára* (Heine 1982: 72) と記録されている。

(4) 味覚語彙の増加

	OJA.	YJA.	KA.
甘い	hílu	hílu	'hílu
美味しい	(hílu)	lezíz	la'zíz
苦い	múr	múr	'muṛṛ
辛い	(múr)	hâr	'hârr
酸い	(múr)	hámud	'hāmuḍ
塩辛い	(múr)	(múr)	'mālih

ただし、(3) に挙げた例に関して、YJA 話者は変異形式の高級性に関し、MSA からの借用語 > KA からの借用語 > その他、の順の階層を認識しているようである (例えば *súgur* > *kúrikúri*, *sijára* > *tába*, *muštéšfa* > *jibítália*)⁶。このため、語彙が入れ替わったというよりは、YJA では変異が豊富になったと捉えた方が正確な場合がある。

その他、YJA では OJA と比べ、類推による種々の新語形成も行われる。生産的ではないが、JA は名詞の持つ卓立 (H ピッチ) を語頭に移動させることにより動詞が形成されることがある (e.g. *dúšman* 「戦う」 < *dušmân*⁷ 「戦い」)。YJA ではこの語形成を拡張し、動名詞から動詞を逆形成している例がみられる。

(5) 類推による動詞の逆形成

OJA.	動名詞	YJA
<i>hájimu</i> 「襲う」	<i>hujûm</i> 「襲撃」	<i>hújumu</i> 「襲う」
<i>álijju</i> 「治療する」	<i>ilâj</i> 「治療」	<i>ílaju</i> 「治療する」

OJA では *sabâ* 「朝」に対しその重複形 *saba-sabâ* 「早朝」が存在するが、*nahâr* 「昼」、*bilêl* 「夜」は重複形を持たない。これに対して、YJA はそれぞれ *nahar-nahâr* 「真っ昼間」、*bilel-bilêl* 「真夜中」という形式を発達させている。

また、JA の動詞の多くは語頭に卓立を持つが、一部の動詞は語頭に卓立を持たないことがある (*wodí* 「与える」 *nesítu* 「忘れる」)。YJA でもこうした動詞は固有の卓立パターンを保持されているが、幼年層 (~10 代前半) の JA ではこれらの動詞も語頭に卓立を持つことがある (i.e. 幼年層 *wódi* 「与える」 *nésitu* 「忘れる」)。

⁶ 筆者のインフォーマントはこれらの変異の違いに関して、JA. *árabi fôk* (字義的には「上の / 高いアラビア語」)、JA. *árabi téhet* (字義的には「下の / 低いアラビア語」) と表現した。この区別はダイグロシアにおける、いわゆる H 変種・L 変種 (H form, L form) のそれと類似している。アラビア語カイロ方言の若年層変種に関する報告 Rizk (2007) は、エジプトでは文語アラビア語・口語アラビア語という対立軸、(伝統的) 口語アラビア語・若年層の口語アラビア語という対立軸をもつ、二重ダイグロシアであると表現している。

⁷ トルコ語 *duşman* 「敵」 (< ペルシャ語 *došmân* 「敵」) からの借用。

2.2 文法の変化

2.1 節では内容語に関する変化をみたが、YJA に関しては文法的な要素 (機能語・接辞) が変化している例もみられる。まず前節と同様に、YJA では (6), (7) のように KA から形式が借用された結果、一対一で OJA と語形が置き換わっているように見える例がみられる⁸。(7) において、YJA は KA の形式のみを借用し、文法性は獲得されていない点は注目に値する (KA では所有者人称を表す一部の接尾辞が文法性による区別を持ち、非修飾名詞の文法性により所有前置詞の形式が変化する)。

(6) 命令法複数形接尾辞

	OJA. ⁹	YJA	KA.
起きろ sg.	gûm	gûm	'gûm
起きろ pl.	gûm takum	gûm-u	'gûm-u
おいで sg.	taâl	taâl	ta'ʕāl
おいで pl.	taâl takum	taâl-u	ta'ʕāl-u

(7) 所有前置詞・所有代名詞

	OJA. ¹⁰	YJA.	KA (男性名詞単数形のみ). ¹¹
の	ta	(h)ag	hagg-
1sg.の	taí	(h)agí	hagg-í
2sg.の	táki	(h)ágak	'hagg-ak (m.) 'hagg-ik (f.)
3sg.の	tô	(h)águ	'hagg-u (m.) 'hagg-a (f.)
1pl.の	tanína	(h)ágana	'hagga-na
2pl.の	tákum	(h)ágakum	'hagga-kum
3pl.の	toúmon	(h)águm	'hagg-um

また、(8) のように YJA は文語的な機能語 (前置詞や接続詞) を獲得している。こうした機能語は教会における説教や若年層年齢組の集会などの場で使用される頻度が高いようであり、やや高級な形式であると考えられる。

⁸ また、人称代名詞でも、JA. 3sg. úwo, 3pl. úmon, **YJA. 3sg. hú, 3pl. húm**, KA. 3sg.m. hu, 3pl. hum のようなペアが見られる。さらに YJA は 3 人称単数女性代名詞 híya (KA. 'hi) を獲得している。

⁹ takum は直前の動詞のプロソディに影響しないため、仲尾 (2010: 40) を改め、接尾辞とはみなさない。なお、takum の変異形 kum は YJA 話者より「旧い形式」とのコメントが得られた。

¹⁰ OJA にはこの他、無意味接頭辞 bi- (bita, bitaí, bitáki, etc.) や ta- (tataí, tatáki, tatô, etc. ただし前置詞 tata は存在しない) を持つ自由変異形も存在する。

¹¹ ここで挙げた形式は所有対象が男性名詞単数のものであり、女性名詞単数の場合 haggat-、男性・女性名詞複数形の場合 haggāt- のように語幹が交替する。なお、旧い KA では 2pl.および 3pl.にも性の区別が存在した (2pl.f. 'hagga-kan, 3pl.f. 'hagg-an, cf. Trimmingham 1946)。

(8) 機能語の増加

YJA. ka	MSA. ka	「～として」(前置詞)
YJA. hâl	MSA. 'hal	「～か」(Yes/No 疑問標識)
YJA. náam	MSA. 'naʕam	「はい」(感動詞)
YJA. an	MSA./KA. ʕan	「～について」(前置詞)
YJA. háta	MSA./KA. 'hattā	「～まで、～さえ」(接続詞)
YJA. fa	MSA./KA. fa	「そして～、なぜなら～」(接続詞)
YJA. kaánu	KA. ka-ʔannu	「～のように」(接続詞)

更に、(9) のように YJA では TMA 標識の分節音が変化し、ピッチのみが弁別的である。この変化は分節音が混同されたことによる YJA で独立に生じた変化とも考えられるが、KA の TMA 標識 b(i)- が形式の上で影響を与えた可能性も考えうる。

(9) TMA 標識の変化

OJA.	YJA.	KA.	
úwo já.	úwo já.	'hu 'ja.	「彼は来た」
úwo bi já.	úwo bi já. (~ úwo gi já.)	'hu ha-'ya-ji.	「彼は来るだろう」
úwo gí já.	úwo bí já. (~ úwo gí já.)	'hu 'b-i-ji	「彼は来るところだ」

OJA は接頭辞 nas- を付加することによる複数形 (associative plural を表す) を持つが、YJA ではこの接頭辞は人間名詞に付加される場合のみ文法的である。YJA 話者の言説「hájer (石) は nās (人々) じゃないから nas-hájer はおかしい」より、nās 「人々」が文法化したものであることを認識しているためだと考えられる。ただし、この文法性判断は KA と共通しており、KA からの干渉も疑われる。

(10) 複数形接頭辞 nas- の文法性判断

	OJA.	YJA.	KA.
父親達	nas-abû	nas-abû	nās-a'bū
石 pl.	nas-hájer	*nas-hájer	*nās-ʕhajar

YJA は以上のように多くの機能語や接辞などを KA・MSA より借用していることが分かった。筆者の調査の限り、現時点で非アラビア語変種から借用されていると考えられる機能形態素は、民族語的なプロソディ形式を持つ一部の名詞に付加されるバリ語起源の複数形接尾辞 -jin のみである¹² (詳細は仲尾 2011: 10, 17)。

¹² Chol (2005: 154) はバリ語の接続詞 leri 「～している間に」が JA に借用されていると述べているが、現時点では筆者はこの事実を確認できていない。

(11) YJA の複数形接尾辞 -jin (異形態: -jin, -jín, -gin, -gín)

	sg.	pl. YJA.	(pl. OJA.)
古着	alíwára	alíwára-jin	(nas-alíwára)
弓	dáŋgá	dáŋgá-jin	(nas-dáŋgá)
ビニル袋	werewéré	werewéré-jin	(nas-werewéré)
大蜥蜴	mányáŋ	mányáŋ-gin	(nas-mányáŋ)

3 ジュバ市における若年層スラング

前節で述べた YJA とは、単に若年層の話者にみられるというだけの特徴であるが、これに対し、(Y)JA 話者自身によって「特殊な語彙である」と認識されている一群の語彙が存在する。多くの YJA 話者はこの語彙群を árabi ta shabâb 「若者のアラビア語」と呼び、「壮年～老年層の人々には通じない」「盛り場の若年層 (男性) が使う言葉だ」などの言説が聞かれる。本稿ではこの語彙群を JA スラング (略号 S.) と呼ぶ。つまり、特定の新語が YJA か S かは話者の主観によって決定する¹³。

なお、スラング (slang)・集団語 (jargon)・隠語 (argot, secret language) は術語として定義されていないため、本稿では便宜的に、スラングは社会的な威信の低さ、集団語は使用母体が特定の集団 (特に世代等の統計的集団を含まない狭義の社会集団) であること、隠語は隠蔽機能が、それぞれ最も本質的であるものとする¹⁴。

JA におけるスラングは近年の発展というわけではなく、1980 年代のジュバでの調査に基づく Miller (2004) は、当時ジュバに「隠語 (argot)」が存在していたことを報告している。筆者の調査の結果、Miller の記録している語彙・語形成は現在ほとんどが使用されておらず¹⁵、実際には隠蔽機能はあまり本質的とは言い難いことから、このスラングが過去約 30 年間で大いに变化した可能性または Miller と筆者は異なる社会階層 / 社会集団を母体として記録した可能性が指摘できる。

また、Miller 語彙の一部については壮年層 (現在 46 歳) のインフォーマントから「今は使われていない、古い言葉だ」とのコメントが得られた。本稿では、現在の若年層によって使用されていない語彙を、旧世代のスラング (略号 OS) と捉える。

¹³ 一般的に、若年層が威信の低い変異を好むことは多くの言語にみられる (東 1997: 90)。しかし、本稿では「若年層の変異」と「威信の低い変異」は同一視できないと考える立場を採る (OJA. tába 「紙煙草」に対し、YJA. sijára, S. simo のように、異なる変異が存在する)。

¹⁴ アラビア語諸変種のスラング・集団語・隠語などに関する概説としては、Bergman (2008), Youssi (2008), Eisele (2008), Hassanein (2009) がある。

¹⁵ Miller の記録している無意味接尾辞 -ešon は現在全く存在せず、無意味接尾辞 -is は生産性を失っている (現在は非スラング語彙となった yumîs ~ yumêš 「母 (JA. yúma)」 yebîs 「父 (JA. yába)」 および OS. andáyis 「酒場 (JA. andáya)」のみ)。また、Miller 語彙には、現在 YJA または S として用いられているものも僅かながら存在する (e.g. Miller. dip 「たくさん < Eng. deep」 YJA. díp 「たくさん」、Miller. patrô 「金持ち」 S. fatirô 「金持ち」)。

3.1 語彙の借用

JA スラングには、通常の変異 (OJA および YJA を含む) とは異なる変異形式が多くみられる。本節ではこうした変異形式のうち、語彙の借用によるものを扱う。

Manfredi (2010) はスーダン北部都市部 (ハルツーム・カドゥグリ) の若年層によって使用されている Rendók と呼ばれる隠語を報告している。Rendók は音位転換等による語彙派生を持つ (e.g. Rendók. *lōz* < KA. *zōl* 「人」)。JA スラングには (12) のように Rendók から借用されたと考えられる語彙がみられる。(13) は Manfredi (2010) からは確認できないが、アラビア語的な形式であり、Rendók 起源の可能性が高い。

(12) Rendók からの借用¹⁶ (Manfredi 2010, 表記は改変した)

S. <i>cúma</i> ~ <i>cámá</i> 「飯、食べる」	Rendók. <i>cuma</i> 「食べ物」
S. <i>jáha</i> ~ <i>jíha</i> 「娘」	Rendók. <i>jāha</i> 「娘」 < KA. <i>hāja</i> 「物」
S. <i>jámid</i> 「良い」	Rendók. <i>jamid</i> 「良い」
S. <i>júluk</i> 「父」	Rendók. <i>juluk</i> 「父」 < KA. <i>kuluj</i> 「父」
S. <i>logó</i> ~ <i>lógo</i> 「娘」	Rendók. <i>loggó</i> 「娘」
S. <i>logóya</i> 「娘」	Rendók. <i>loggo-ya</i> 「娘」
S. <i>ókar</i> ~ <i>wókar</i> 「部屋」	Rendók. <i>wakar</i> 「部屋」
S. <i>sân</i> 「奴」	Rendók. <i>sān</i> 「奴」 < KA. <i>nās</i> 「人々」
S. <i>sántar</i> 「部屋」	Rendók. <i>santa</i> 「部屋」 < 英語 <i>center</i> 「中心」

(13) Rendók からの借用である可能性のある JA スラング

S. <i>díga</i> 「飲む」	S. <i>fáhma</i> 「話」	S. <i>fárda</i> 「友」
S. <i>imbérim</i> 「行く」	S. <i>jiléda</i> 「革ケース」	S. <i>jôs</i> 「2」
S. <i>julkéna</i> ~ <i>jelkána</i> 「母」	S. <i>mudówir</i> 「酔漢」	S. <i>wáhma</i> 「パーティ」
OS. <i>aríf</i> 「友」	OS. <i>zerdíya</i> 「ケチ」	OS. <i>fandasíya</i> 「高慢な」

また、バリ語 (Bari) からの借用も顕著である。バリ語は南部スーダン中央エクアトリア州で話される東ナイル系言語であり、ジュバ最大の民族語である。現在は使われない Miller 語彙の中にもバリ語起源らしきものが存在する (e.g. Miller. *fikadin* 「与える」 Bari. *putukin* 「与える」, Miller. *kateluk* 「卵」 Bari. *katolok* 「卵 pl.」, Miller. *monyameji* 「人々」 Bari. *monyomiji* 「(民族の政治的中心となる) 年齢階梯」)¹⁷。

¹⁶ *cámá* はルオ系言語からの借用であると考えられるし、Miller (2004) は *logo* 「尻軽女」を記録している。少なくともこれらの例については、Rendók から S に借用されたのではなく、逆に S から Rendók に借用された可能性を指摘することもできそうである。

¹⁷ バリ語の例は基本的に Spagnolo (1960), Yokwe (1987) 等に基づき、表記は現在南部スーダンで使用されるバリ語正書法に修正している。

(14) S. <i>báyak</i> 「悪い」	Bari. <i>bayak</i> 「悪い」
S. <i>boŋ</i> 「服」	Bari. <i>boŋgo</i> 「服」
S. <i>jêk</i> 「友」	Bari. <i>jak</i> 「人」
S. <i>lón dó</i> 「アラブ人」	Bari. <i>londo</i> 「アラブ人」
S. <i>loŋonyó</i> 「ケチ」	Bari. <i>lokinyo</i> 「貪欲な」
S. <i>muŋga</i> 「石」	Bari. <i>muŋga</i> 「石」

一部のスラング語彙は話者によってバリ語以外の南部スーダンの民族語起源であると言われるが、元の言語の形式は未確認である (S. *cámá* 「飯、食べる < ルオ系言語」、S. *kúba* 「カップル < ポジュル語」、OS. *gúti* 「娘 < モル語」)。

(15) は外国語からの借用である。現在ジュバにはケニア・ウガンダ人商人¹⁸が多く、スラング以外にもウガンダ・ケニアから新たに持ち込まれたサービス・商品等の語彙はスワヒリ語から直接借用されているものが多い¹⁹。

(15) S. <i>báŋgi</i> 「大麻」	スワヒリ語 <i>bangi</i> 「大麻」
S. <i>bôb</i> 「銭」	英語スラング <i>bob</i> 「シリング」
S. <i>cíci</i> 「娘」	英語スラング <i>chi-chis</i> 「乳房」?
S. <i>déd</i> 「死ぬ」	英語 <i>dead</i> 「死んだ」
S. <i>fatirô</i> 「金持ち」	仏語 <i>patron</i> 「経営者」
S. <i>jigijigi</i> 「性交」	スワヒリ語スラング <i>jigijigi</i> 「性交」 ²⁰
S. <i>larkí</i> 「娘」	ヒンディー語 <i>laṛkī</i> 「娘」
S. <i>motéma</i> 「娘」	リンガラ語 <i>motéma</i> 「心」
S. <i>patí</i> 「パーティ」	仏語 <i>partie</i> / 英語 <i>party</i> 「パーティ」
S. <i>pómbe</i> 「ビール」	スワヒリ語 <i>pombe</i> 「ビール」
S. <i>tôp</i> 「良い」	英語 <i>top</i> 「頂上」
S. <i>zirofô</i> 「田舎者」	英語 04? (英語では特別な意味はない)
OS. <i>cakúla</i> 「食べ物」	スワヒリ語 <i>chakula</i> 「食べ物」
OS. <i>dikôr</i> 「偉そうな」	仏語 <i>décor</i> 「装飾、みせかけ」
OS. <i>énjin</i> 「機械、ミシン」	英語 <i>engine</i> 「エンジン」
OS. <i>japanîs</i> 「ディンカ人」	英語 <i>Japanese</i> 「日本人」 ²¹

¹⁸ JA では *nas-wéwe* と呼ばれる (*wewe* はスワヒリ語 2 人称単数代名詞からの借用)。

¹⁹ 例えば JA. *bodabóda* ~ *bóda* 「バイクタクシー」 JA. *teksí* 「簡易バス」 JA. *biliyádo* 「ビリヤード」 JA. *dóbi* ~ *dúbi* 「洗濯屋」 JA. *kánga* 「カンガ (女性用の装飾布)」 JA. *pilipíli* 「唐辛子」 JA. *cái* 「チャイ (東アフリカ風紅茶)」 JA. *mandázi* 「マンダジ (東アフリカ風ドーナツ)」

²⁰ このスラングは東アフリカの他、少なくともインド広域やパプアニューギニアでも使用されている (記述研研究会における長田俊樹氏、千田俊太郎氏のコメント)。

²¹ かつてディンカ人の陰口を言う際、隠語的に「日本人」と言ったことが起源と言われる。

なお、以下のものは現時点では語源が全く不明なスラング語彙である。

- (16) S. aṅgáli 「(映画の) ヒーロー」 S. bákra 「カンニングペーパー」 S. bámba 「娘」
 S. bîs 「悪い」 S. cali 「娼婦」 S. dérti 「パーティ」 S. digêr ~ dijêr 「パーティ」
 S. falanġúta 「娼婦」 S. gáta liye 「こっそり逃げる (JA. gáta は「切る」)」
 S. gáta wíj 「二手から追いつめる」 S. gísu 「うまくやる」 S. háŋkaša 「娼婦」
 S. ikilímik 「デブ」 S. ják 「遊ぶ」 S. jekina 「友」 S. jiliŋ 「自転車」 S. jîs 「銭」
 S. kadá ~ kada 「足」 S. kweret 「女性器」 S. lagá 「飯」 S. logot 「男性器」
 S. loŋík ~ lonyík 「ケチ」 S. loŋinya 「不潔な」 S. lotúle 「泥棒」
 S. mocot 「カンニングペーパー」 S. modót 「粥」 S. myăŋ 「酒」 S. niŋa 「大便」
 S. niŋga 「空腹」 S. nyet 「女性器」 S. rúmba 「飯、食べる」 S. sôs 「酒」
 S. terdiša 「銭」 S. túf 「多い」 S. wág 「行く」 S. yók 「死ぬ」 OS. ánša 「娘」
 OS. aṅgóla 「娘」 OS. bányák 「酔っ払い」 OS. gúndi 「娘」 OS. kúbi 「粗暴な」
 OS. nyíj 「銭」 OS. rúka 「偉そうな」 OS. šúri 「酒」 OS. vite 「娘」

3.2 意味変化

(17) は、通常の意味とスラングの意味が異なる例である。これらが意味変化による新語である確証はなく、KA や Rendók などからの影響を受けている可能性もある。

(17)	JA での意味	S での意味
fóuru	沸騰させる	性交する
sílik	電線	美人
áfuta	開ける	走る
hadíd	鉄	自動車
batâl	悪い	とても
wáراك	(1 枚の) 葉	10 スーダンポンド
waraktên	(2 枚の) 葉	20 スーダンポンド
kámsa aurâk	(5 枚の) 葉	50 スーダンポンド

3.3 短縮語形成

JA スラングは、以下のような特徴的な音韻形式²² をもつ短縮語形成を持つ。Miller (2004) は *iši* < JA. *iširin* 「20」 *banto* < JA. *bantalon* 「ズボン」を記録しており、1980 年代頃からこの形式の短縮語が存在していたことが分かる。実際に、壮年層 (現在 46 歳) の話者からも「昔から短縮語は存在した」との回想も得られた。

²² 基本的に元の語の語頭 2 音節に L のピッチを付与された形式。仲尾 (2010: 40) ではピッチを /HH.HL/ としたが、これを改める (cf. 音声実現 /baJkaJ/ [baJkaJ]~[baJkaJ] 「トイレ」)。

(18)	トイレ	S. baka	JA. bakána
	ズボン	S. banta~bonto	JA. bantalôn~bontolôn
	少年	S. bonjo	JA. bonjôs
	不遜	S. gili	JA. gil-ádab
	教会	S. keni	JA. kenísa
	泥棒	S. lotu	S. lotúle
	ビール	S. meri	JA. merísa
	バイク	S. moto	JA. mótor
	紙煙草	S. simo	英語 smoke
	総菜パン	S. sondo	JA. sondowîsh

また、**S. ali**「ポンド」<JA. álif「千」、**OS. dere**「学校」<JA. dirása「勉強」のように意味が変化している例もみられる。また、スラングではないが、JA. kau「ササゲ豆の一種」は英語 cowpea を短縮語化したものであると考えられ、OJA 話者にも用いられる。更に、プロソディの現れが特殊な、**S. kasú**<JA. kásuma「口」、**S. logó ~ lógo**<S. logóya「娘」のような短縮語もみられる。この並行例と考えられるものに、人名 emánuel (エマヌエル) の愛称 emá がある (その他の人名は愛称形をもたない)。

この短縮語は複数形を形成する際、(19) のように、民族語的なプロソディ形式を持つ一部の語にのみ付加される接尾辞 -jín を伴うことがある (cf. (11))。このことは、短縮語が「民族語的 (JA. rutân rutân)」であることを示していると考えられる。

(19)	S. mede 「学校 sg.」	S. mede-jín 「学校 pl.」
	S. sondo 「総菜パン sg.」	S. sondo-jín 「総菜パン pl.」

なお、筆者の調査の限り、以下に示す十桁の数詞に関して、20代 (テネット人複数話者) と30代 (パリ人E氏) の話者では短縮形が異なる。20代の話者からは30代の話者の短縮語形式について「古い短縮語」であるとコメントが得られた。

(20)	20代 S.	30代 S.	JA.
	20 iši	iši	iširîn,
	30 tele	tele	teletîn
	40 aru	なし	arbeîn
	50 kumu	kami	kamsîn
	60 sutu	なし	sitîn
	70 subu	sebe	sebeîn
	80 tumu	tami	tamanîn
	90 tuzu	tize	tizeîn

3.4 無意味接尾辞 -(h)e

現在の JA スラングは、Miller (2004) の記録している無意味接尾辞を失っているが、恐らく新たに無意味接尾辞 -(h)e による語形成を発達させている。この接尾辞が付加された場合、語幹の卓立は移動するが、あまり規則的ではないようである。一桁の数詞はこの無意味接尾辞が付加されることが多い。

(21)	S.	JA.
ウサギ	arnab-ê	árnab
邪魔	berjíl-e	berjila (cf. berjilu 邪魔する)
家	bet-ê	bêt
顎、顎髭	dikín-e	díkin
目	en-ê	éna
ジュバ	jub-ê	júba
家	juw-ê	júwa
牛乳	lebén-e	lében
頭	ras-ê	râs
髪	saar-ê	sáar
1	wahíd-e	wáhid
2	itnin-ê	itnîn
3	talata-hê	taláta
4	arba-hê	árba
5	kamsa-hê	kámsa
6	sita-hê	síta
7	saba-hê	sába
8	tamaniya-hê	tamániya
9	tiza-hê	tíza
10	ašara-hê	ášara
100	mi-ê	mía

3.5 接頭辞 lo-, lu-

次はバリ語起源の接頭辞 lo-, lu-「 ~ の (特徴を持つ)」が付加された例である。僅かながら、非スラング語彙にもこの接頭辞を持つ語彙が存在する (JA. lónútút「小人症患者」cf. Bari. ŋutut「小さい」)。また、スラング語彙 S. nagúr「老婆」S. logúr「老爺」S. neím「母」に関して、同じバリ語の接頭辞 lo-, na- (na- はバリ語で女性名詞を形成する) を取り出すことができるが、語幹の語源は今のところ不明である。

- (22) S. ló-myǎŋ 「酒飲み」 < S. myǎŋ 「酒」
 S. lo-nyín 「ケチ」 < S. nyín 「銭」
 S. lo-pómbé 「酒飲み」 < S. pómbé 「ビール」 < スワヒリ語 pombe
 S. lú-bonjo 「少年」 < S. bonjo 「少年」 < JA. bonjôs
 S. lú-beléd-e 「田舎者」 < JA. béled 「国、田舎」

3.6 スラング語彙の特徴のまとめ

以上では語の形式に従って JA スラングの特徴を概観し、形態派生や (アドホックな) 意味の変化などがみられることが分かった。しかし筆者の調査の限り、スラングは音韻論・統語論的には特殊な振る舞いをしない。

スラング語彙の意味的側面に着目すると、相当数の罵倒語・卑語などが存在することがわかる (性、飲酒、犯罪、差別等に関する語彙)。こうしたものは公的な場面ではタブーであるが、スラング語彙の知識はジュバの JA 話者に広く共有されており、「ジュバ人」であるための合い言葉として機能している可能性がある。また、スラングが民族語および短縮語 (民族語的な音韻形式を持つ) を多く持つことは、民族語が潜在的威信 (covert prestige) を持つことを示している可能性もある。

また、JA スラングは数多くの同義語を持つことも分かる。JA. biniya 「娘 (女の子、ガールフレンド)」に対応するスラングとしては、やや古いものを含めれば S. lógo ~ logó, S. logóya, S. jíha ~ jáha, S. cíci, S. bámba, OS. gúti, OS. gúndi, OS. anjóra, OS. ánsa, OS. vite があつた。ただし、逆に男性を表す語彙は極度に少なく、これはスラングが主に若年層の男性によって活発に発展し使用されていることによると考えられる²³。ただし、スラングは体系的に使用される訳ではなく、一回の発話中に複数のスラング語彙が出現することはむしろ稀である。このことはスラングが独立した「言語変種」ではなく、ファッション的に用いられている、言語 (変種) の「部分集合 (千田 2010)」であることを示している。

以上より、JA スラングの特徴は以下のようにまとめられる。

- Rendók やバリ語、外国語からの借用語を持つ。
- 形態派生 (短縮語、無意味形態素など) ・意味変化による新語形成を持つ。
- スラング語彙は音韻論・統語論的には特殊な振る舞いをしない。
- 罵倒語や卑語などタブーとなりうる語彙が豊富である。
- (特に「女の子」など) 一部の語に関して同義語が非常に豊富である。
- 主に若年層の男性によって使用されている。
- スラングは言語変種ではなく、言語 (変種) の部分集合である。

²³ (若年層) 女性はこのようなスラングを積極的に使用していないようであるが、現時点では確証は得られていない。

4 ジュバ・アラビア語の脱クレオール化

本節では、高級語彙や形態論が獲得されている、(恐らく話者自身によって) JA で書かれたテキスト (文語的 JA, 4.1~4.3)、およびハルツーム居住経験を持つ南部スーダン人の話す JA 変種 (KJA) の談話データ (4.4) を提示する。

これらのデータは、JA が KA や MSA との接触の結果、部分的に脱クレオール化が生じ、後クレオール連続体 (post-creole continuum) が発生していること、および文語的 JA と KJA がこの連続体の中で中層話体 (mesolect, ピジン・クレオールと目標言語の接触の結果生じる、中間的な変種) として位置づけられることを示す²⁴。

4.1 文語的 JA におけるアラビア語からの大量の高級語彙借用

JA は教会における説教、テレビやラジオの放送、政治家の演説など公的な場面でも使用され、JA によるパンフレット類も僅かながら出版されている。こうした場面で使用される JA (仮に文語的 JA と呼ぶ) には、日常的に使用されない KA や MSA からの高級語彙が多数借用されることがある²⁵。

豪州ニューサウスウェールズ州 DADHC (Department of Ageing, Disability & Home Care) 発行の難民支援用パンフレット *Rabau iyal Sawa sawa (ma'abat)* 『共に子供を育てよう』には、主に現代標準アラビア語から多数の高級語彙が借用されているが、このテキストでは次のように 2 種類の変異形式が併記されている例が多い (ただし H は MSA からの借用による高級な変異、L は非高級な変異を表す)。

(23) DADHC	筆者の調査による音韻形式
<i>Sawa sawa (ma'abat)</i>	L. sawa-sáwa 共に (H. ma báad 共に)
<i>subian (shaab)</i>	H. subiyân 若者 (L. šâb 若者)
<i>nimira wahid (al awel)</i>	L. nimira-wáhid 1 番の (H. al áwel 最初の)
<i>ma adil (gayr adil)</i>	L. mâ adîl 楽でない (H. gáir adîl 楽でない)
<i>muk-tene/moksut</i>	H. mukténe 満足 / L. moksût 幸せ
<i>kalam/raya</i>	L. kalâm 話 / H. ráya 意見
<i>issimat/asma</i>	L. isim-ât 名前 pl. / H. asámi 名前 pl.
<i>atfal/iyal</i>	H. atfâl 子供 pl. / L. iyâl 子供 pl.
<i>wonusu/itesil</i>	L. wónusu 話す / H. itésil 連絡する

²⁴ Owens (1977: xiii) は、ハルツームで話される JA を起点に、南部スーダンの JA を経てウガンダ・ケニアで話される JA と同系のクレオール・ヌビ語を終点とすると、南下するに従い KA との相通性が減少する、アラビア語クレオール連続体と見なせると述べている (ただし Owens (1977) は JA を「ヌビ語 (の方言)」と呼んでいる)。

²⁵ 宗教者や政治家の多くがハルツーム等で KA や MSA など、ピジン化されてないアラビア語変種による教育を受けたことに起因する可能性がある。

なお、口語・文語テキストにみられる内容語の異なり語数・延べ語数を比較すると、以下のような数値が得られた²⁶。母数が異なるが、文語テキストは口語テキストに比べて、述ベ語数中の異なり語数がかなり多いことが見て取れる。

(24) 口語・文語テキスト中の内容語の異なり語数・延べ語数

	口語 a	口語 b	口語平均	文語 a	文語 b	文語平均
内容語異なり	87	138	112.5	157	178	167.5
内容語延べ	263	678	470.5	359	457	408
全体延べ	528	1201	864.5	720	908	814

しかし、高級語彙の借用元は MSA や KA だけではなく、特に近年は英語からも数多くの語彙が借用されている。例として、2010 年のスーダン国政選挙、2011 年の国民投票に際し、**intikabât** < MSA, **elékšon** < Eng. 「選挙」, **istifta** < MSA, **referéndom** ~ **refrándam** < Eng. 「国民投票」, **sóut** ~ **sówit** < MSA, **vóut** < Eng. 「投票する」, **infisâl** < MSA, **sapréšon** < Eng. 「分離独立」, **wihida** < MSA, **yúniiti** < Eng. 「統一」のような語彙がメディアを中心に JA に取り入れられ、現在まで使用されている。

4.2 アラビア語的形態論の獲得 I - 動詞未完了形主語人称標識 -

ピジン・クレオール諸語でより典型的に見られる脱クレオール化現象として、目標言語の文法 (特に形態論) の獲得が挙げられる。JA は主語人称や TMA による動詞活用を持たないが、KA は (25) のような動詞活用体系を持つ (動詞「書く」)。

(25)	完了形	未完了形 (接続法)	未完了形 (直説法現在)
1sg.	ka'tab-ta	'a-ktib	'b-a-ktib
2sg.m.	ka'tab-ta	'ta-ktib	bi-'ta-ktib
2sg.f.	ka'tab-ti	'ta-ktib-i	bi-'ta-ktib-i
3sg.m.	'katab	'ya-ktib	'b-i-ktib
3sg.f.	'katab-at	'ta-ktib	bi-'ta-ktib
1pl.	ka'tab-na	'na-ktib	bi-'na-ktib-u
2pl.	ka'tab-tum	'ta-ktib-u	bi-'ta-ktib-u
3pl.	'katab-u	'ya-ktib-u	'b-i-ktib-u

²⁶ 口語テキストには仲尾 (2010) 収録の民話テキスト 2 編、文語テキストにはカナダの NGO Manitoba Interfaith International Council Inc. 出版の啓蒙パンフレット *Istigalalia Sex ta Iyal* 『年少者の性的虐待』(文語 a)、豪州クイーンズランド州教育省発行のパンフレット *Barnamij bita Madaresa Rowda le Kul Jana* 『全ての子供への幼稚園プログラム』(文語 b) を使用した。なお、内容語は固有名詞・数字を除いた、名詞・形容詞・動詞・副詞・感動詞・数詞を表す。

Versteegh (1993) は Mahmud (1979: 187, 筆者未見) がジュバで記録した (26) のデータを元に、KA の主語人称接頭辞 *ya-* (3 人称単数男性), *ta-* (2 人称単数男性) が未完了非現実を表す TMA 標識 *bi-* の自由変異として獲得されていると主張している。

(26)	<i>fi</i>	<i>tannin</i>	<i>juju</i>	<i>naman</i>	<i>jit</i>	<i>fi</i>	<i>madrasa</i>	<i>ma</i>
	<i>there</i>	<i>other</i>	<i>some</i>	<i>whenever</i>	<i>come</i>	<i>from</i>	<i>school</i>	<i>not</i>
	<i>YA-kutubalu</i>	<i>fi</i>	<i>istade</i>	<i>TA-kutubalu</i>	<i>bes</i>	<i>je</i>	<i>del</i>	
	<i>care</i>	<i>for</i>	<i>study</i>	<i>care</i>	<i>only</i>	<i>like</i>	<i>those</i>	
	<i>ali</i>	<i>fi</i>	<i>sekondari</i>	<i>ma</i>	<i>BI-kutubalu</i>	<i>fi</i>	<i>giraya</i>	<i>bitau</i>
	<i>who</i>	<i>in</i>	<i>secondary school</i>	<i>not</i>	<i>care</i>	<i>for</i>	<i>studies</i>	<i>theirs</i>

‘Some students, when they are on vacation, they don’t care to study, they only care like those in secondary school; they don’t care for their studies.’

Versteegh の主張は JA の脱クレオール化の証拠としてしばしば引用されるが、筆者の調査の限り、自由変異としてこうした接頭辞を獲得している話者は見られない。しかし、ある種の主語人称標識の獲得は複数の JA テキストから確認できる。

以下に JA で書かれたテキストに見られる動詞未完了形主語人称標識の例を列挙するが、いずれも従属節または接続法の動詞に見られる点で一致している。

4.2.1 *Musaada le zabain ta Centrelink al shan ligo shokol*

豪州の政府機関 Centrelink 発行のパンフレット *Musaada le zabain ta Centrelink al shan ligo shokol* 『Centrelink のお客様への就職支援』の JA には、次のような非現実法 (接続法) にのみ現れる KA 的な人称標識 *ya* (3 人称), *ta* (2 人称) が見つかる。これらは表記上も独立して書かれている点も特殊である (太字は筆者)。ただし、(27c) *aba* 「拒む」は従属節中の動詞であるが、この人称標識が見られない。

- (27) a. *Kulu nas ta Ostralia indum hak al shan ya ishtakal*
 全ての 人々 の 豪州 持つ-3pl. 権利 ために YA 働く
 「全ての豪州人は働く権利を持っています」
- b. *Dairin ita ta fatasu shokol shedid*
 欲する-pl. 貴方 TA 探す 仕事 とても
 「(私たちは) 貴方に仕事を探そうにしてほしい」
- c. *iza ita aba ta amulu kararat ta Centrelink*
 もし 貴方 拒む TA する 決定 pl. の Centrelink
 「もし貴方が Centrelink の諸決定を拒否した場合」

4.2.2 “Kursi Wu Gurush”

南部スーダンの歌手 Emmanuel Kembe の歌曲 “Kursi Wu Gurush”²⁷ 『椅子とカネ』の歌詞にも類似した現象が見られる。ここでも、接続法と考えられる環境において動詞の主語人称を表す標識 ne- (1 人称複数), te (2 人称), ye (3 人称) が観察される。

ただし (28a) nebni は語幹も交替しており、屈折形式が借用されていると捉えた方が正確である (JA. ábinu 「建てる」, KA. ·bana 「(彼は) 建てた」 ·na-bni 「我々は建てよう」)。その他の例では語幹は交替していない (特に、b. géni 「居る」 e. rúwa 「行く」 f. rija 「戻る」は KA には見られず JA にのみ見られる形式)。なお、(28d, e, f) の主動詞は be jere 「走る」, bi mutu 「死ぬ」, be mutu 「死ぬ」(bi, be は非現実未完了を表す TMA 標識) であるが、いずれも主語人称標識を伴っていない。

(28) a. Ashan nebni beledna Sudan Jedid.

ため NE-建てる 国-1pl. スーダン 新生

「私たちが私たちの国、新生スーダンを建国するために」

b. Ashan negeni fi huriya fi Sudan jedid.

ため NE-居る に 自由 に スーダン 新生

「私たちが新生スーダンで自由裡に過ごすために」

c. te shufum..

TE 見る(shuf)-3pl.acc.(um)

「彼らを見よ」

d. Lama ye sekin fi gaba be jere le jalaba.

とき YE 住む に 森 北部人のところに走っていく

「ブッシュに住んでいる時は北部人 (アラブ政権) のところに走っていく」

e. Lama ye ruwa le gaba, kam alf miskin bi mutu be sababu.

とき YE 行く に 森 その為何千もの不憫な人々が死ぬ

「森に行くときには、そのために何千の不憫な人々が死ぬ」

f. lama ye rija le jalaba, kam alf miskin be mutu

とき YE 戻る へ 北部人 何千もの不憫な人々が死ぬ

「北部人のところに戻る時には何千もの不憫な人々が死ぬ」

²⁷ Emmanuel Kembe (2000) Liberate Southern Sudan 収録。現在南部スーダン政府によって発禁とされており、歌詞は Antiwar Songs (www.antiwarsongs.org) に掲載されているものに基づく。

4.2.3 Watson & Ola (1985)

外国人向け JA 教材 Watson & Ola (1985: 88) は、従属節の主語が 1 人称 (単数・複数) である場合、動詞に接頭辞 *ni-* が付加されることがあると述べている。

- (29) John kelimu (le ana/aniina) niakulu akil de.
ジョン 言う (私/私たちに) NI-食べる 食べ物 この
「ジョンは私たちにこの食べ物を食べるように言った」(太字は筆者)

KA の主語人称接頭辞 (25) のうち、1 人称単数と 1 人称複数異なる形式を持つ。以上の JA テキストではいずれの人称においても性と数が中和しており、1 人称においては本来複数を表す KA. *na-* (JA. *ni-*, *ne-*) が一般化する点は注目に値する²⁸。

4.3 アラビア語的形態論の獲得 II - 接尾人称代名詞 -

前節では KA の影響を受けた JA 変種に見られる動詞未完了形主語標識について述べたが、JA 変種にはその他にも KA 的な形態変化の獲得が見られることがある²⁹。

例えば (25) に挙げた動詞完了形人称接尾辞は次節 (4.4) で挙げる例に頻出する。その他、特に顕著なものに接尾人称代名詞³⁰がある。KA では「持つ」を表す形式について、主語人称により (30) の接尾人称代名詞が現れる。

- (30) 1sg. *ʕindī* 2sg.m. *ʕind-ak*, f. *ʕind-ik* 3sg.m. *ʕind-u*, f. *ʕind-a*
1pl. *ʕinda-na* 2pl. *ʕinda-kum* 3pl. *ʕind-um*

JA. *indu* 「持つ (不変化の所有詞, 仲尾 2010)」は主語人称変化を持たないが、ハルツーム生まれの JA 話者、P 氏 (cf. 4.4.2) の話す個人方言 (idiolect) には、(31) の形式が現れる。このような接尾人称代名詞の獲得は前節の JA テキストの例 (i.e. *indum* (27a), *beledna* (28a)) に加え、以下に挙げるように広く見られるようである。

²⁸ スーダン西部方言 (ワダイ = ダルフル方言) では、いわゆる口語アラビア語マグレブ方言同様、1sg. *na-* 語幹, 1pl. *na-* 語幹-*u* の形式が発達しており、この形式の影響も考えられる (ハルツームで南部スーダン人が居住する地区、例えば北ハルツームのタカムル地区等には西部出身者も多く居住しているため。cf. Miller & Abu-Manga 1992)。

²⁹ その他、本稿では十分扱わないが、一般的な JA で動詞である一部の語が、KA の影響を受けた JA では主語の数に一致して形容詞等に見られる複数形接尾辞 *-in* が付加されることがある (JA. *dēr* 「欲しい」*der-in* 「欲しい pl.」, cf. (27b) 、「*māši* 「行く」*mašîn* 「行く pl.」)。

³⁰ KA において人称代名詞の名詞・動詞・前置詞等に後接し、それぞれ名詞修飾語・動詞目的語・前置詞目的語となる形式 (e.g. *balad-na* 「私たちの国」, *dagga-na* 「(彼は) 私たちを殴った」, *le-na* 「私たちに」)。KA の形式 (30) は前置詞 *ʕind(a)* 「～の所に」+ 接尾人称代名詞と分析できる (ただし、この前置詞は接尾人称代名詞のみが目的語となる)。

- (31) 1sg. **indí** 2sg. **indak** 3sg. **indu**
 1pl. **indana** 2pl. **indakum** 3pl. **indum**

4.3.1 *Musaada le zabain ta Centrelink al shan ligo shokol*

(27a) indum に加え、Centrelink の別箇所には 2sg. の形式 indak も記録されている。

- (32) ita ma bi kun indak shurut ta ishtarak
 貴方 否定 TMA 繫辞 INDU-2sg. 条件 の 参加
 「貴方は参加条件を持たない (満たさない) でしょう」

4.3.2 *Watson & Ola (1985)*

Watson & Ola (1985: 59) は所有詞 indu について以下のように述べている。

- (32) Indu ‘have’ has three optional forms for 1st sg., 1 pl., and 3rd pl:
 ana indu/indi ita indu huwo indu
 aniina indu/indana itakum indu humon indu/indum

4.2.3 の同書の記述および上掲の記述では、共に 1 人称が獲得され 2 人称は獲得されていない。この記述は 80 年代のものであり、このデータから形態変化は 1 人称から漸次的に獲得された可能性が指摘できるが、さらに十分な調査が必要である。

4.4 ハルツーム在住南部スーダン人のアラビア語変種

ハルツーム在住南部スーダン人の少なくとも一部は、複数のアラビア語変種をコード切り替えする。こうした南部人話者は、KA 話者 (主にアラブ人) との会話には後クレオール連続体のかなり上層の変種を用いるため、ハルツーム在住南部人の話すアラビア語変種が JA から KA にシフトしているように見えることがある (飛内 2010)³¹。この現象はある種の二言語変種併用 (diglossia) とみなすこともできるが、言語事実に照らし、本稿ではハルツーム在住の南部スーダン人が話すアラビア語変種を一様に、「ハルツームのジュバ・アラビア語 (略号 KJA)」と呼ぶ。

³¹ Miller & Abu-Manga (1992) はハルツーム在住の南部スーダン人について、多くは JA の影響を受けつつも KA が獲得されていると報告している。しかし、この記述は上記の事実を無視しており、社会言語学的記述として問題がある。なお、一般的に南部スーダン人は MSA と KA を峻別せず、JA (JA. árabi ta júba, arabi-júba) と対峙させてこれを「ハルツーム・アラビア語 (JA. árabi ta kortûm, arabi-kortûm)」、³¹「アラブ人のアラビア語 (JA. árabi ta mundukúru, árabi ta jalába)」、³¹「古典的なアラビア語 (“classical Arabic”)」等と呼ぶ。これに対し、北部スーダン人 (特にアラビア語母語話者) は MSA およびコーランのアラビア語 (KA. al-‘fuṣṣha) に対峙させ、KA および JA を「口語アラビア語 (KA. dāri’jīya)」と呼ぶ。

4.4.1 ジュバ生まれハルツーム在住経験者の「JA」と「KA」

筆者が2009年9月に調査した際のインフォーマントE氏は、ジュバ生まれながら20歳頃から30歳頃までの約10年間をハルツームで過ごした経験を持つが、彼は「JA」と「KA」を峻別している。(33)はE氏が「JA」と申告して行った談話、(34)はE氏が「KA」と申告して行った談話からのデータである。

- (33) áse dé, ána déru wónusu kalâm besít, kalâm ta
 今 私 欲する 話す 話 少し 話 の
 aulâd u banât.
 男の子 pl. と 女子 pl.
 「今から、私は少し、若い男性と女性達の話をしたと思います」

- (34) ána hássi, dêr ni-kéllim šan hayâ bita
 私 今 欲する 1sg-話す について 生活 の
 šabâb wa šabbât
 若者 m.pl. と 若者 f.pl.
 「私は今から、若い男女の生活について話したいと思います」

(34) に示した斜体は非JA的要素であるが、E氏の「KA」には語彙的 (JA. áse dé, KA. hássi 「今」)、形態的 (ni-kéllim 「私が話す」)、音韻的 (/ʕ/, /h/) に「KAらしい」要素が多く混入しているが、KAには見られない要素 dêr 「欲する (KA. dāyir)」 hayâ bita šabâb wa šabbât 「若い男女の生活 (KA. ha'yāt ša'bāb wa šab'bāt)」が見られ、完全にはKAが習得されていないことが分かる。

4.4.2 ハルツーム生まれ南部スーダン人の「JA」

前節E氏と異なり、全てのハルツーム在住の南部スーダン人が二種類の (ジュバ・) アラビア語変種を獲得している訳ではなく、また全てのJA話者が一様にKAの影響を受けている訳ではない。筆者は2010年9月の調査において、ハルツーム生まれのJA話者2名をインフォーマントとして得た。P氏 (1986年生) は同年5月頃、M氏 (1992年生) は同年9月にジュバに越して来た新来の南部人である。両者ともに「JA」のみを話すと申告しているが、KAからの影響の受け方が異なる。

(35), (36) はP氏による自伝の一部であるが、ジュバ生え抜きのJA話者、J氏が隣でP氏の「JA」に対して水を注している。J氏がP氏の「JA」に見られるKA的な形態変化や語彙選択を「非JA的」とであると捉え指摘している点、そしてその指摘を受けてP氏が訂正している点から、両氏ともにP氏の「JA」が非JA的であると認識していることが伺える。

(35) P 氏「私は (ハルツームの) 私のおじのところに行った」

P: ána gúm-ta mashê-t le kâl agí.
私 始めた-1sg. 行った-1sg. に おじ 私の

J: ána rúwa.
私 行く

P: ána rúwa le kâl agí, fi kortûm.
私 行く に おじ 私の に ハルツーム

J: kâl taí.
おじ 私の

P: ána rúwa le kâl taí fi kortûm.
私 行く に おじ 私の に ハルツーム

(36) 父との対話

P: ána mashê-t u fêelan ligî-t yebîs bitaí, u...
私 行った-1sg. そして 終に 見つけた-1sg. 父 私の そして
「私は行って、終に私の父を見つけた。そして...」

J: ána ligó abû taí.
私 見つける 父 私の
「私は私の父を見つけた」

P: ána ligé[t]... abû taí,
私 見つけた-1sg. 父 私の
「私は私の父を見つけた」

u ána gaát-ta ma úwo, ána gúm-ta já
そして 私 居た-1sg. と 彼 私 始めた-1sg. 来る
「そして私は彼と[暫く一緒に]居て、私は[ここに]来た」

J: ána géni ma úwo, yaú ána ríja.
私 居ると 彼 そして 私 戻る
「私は彼と居て、こうして私は戻った」

P: ána gut-ta ló-u “yebîs, ána khalâs gí rúwa júba,
私 言った-1sg. に-3sg. 父さん 私 もう TMA 行く ジュバ
ána moksût”.
私 幸せ

「私は彼に「父さん、私はもうジュバに行きます。嬉しかったよ。」と言った」

J: ána kélim le úwo, yebîs, ána gí rúwa júba.
私 言う に 彼 父さん 私 TMA 行く ジュバ
「私は彼に「父さん、私はジュバに行きます」と言った」

P: (yeah), yebís, ána gí rúwa júba.
 (ああ[英語]) 父さん 私 TMA 行く ジュバ
 「(ああ、) 「父さん、私はジュバに行きます」」

J: yába ána gí rúwa júba.
 父 私 TMA 行く ジュバ
 「父さん、私はジュバに行きます」」

(35), (36) に斜体で示した箇所は KA 的要素であるが、P 氏の JA 上層話体は基本的に形態的な KA の影響は顕著であるが、語彙的・音韻的には KA 的な要素はあまり見られない。(37) は M 氏によるハルツームにおけるキリスト教諸宗派の祈り方についての談話の一部であるが、P 氏に対し M 氏は語彙的にはやや KA の影響 (斜体の箇所) が見られるが、形態的・音韻的には KA の影響は全くみられない。

(37) ána kátolik. yála nas-kátolik bí séli... *muxtélif*
 私 旧教 そして 旧教信者達 TMA 祈る 違う
 min bagi-nâs.ta nas-protestânt, wele kída.
 から 残りの-人々 の-新教信者達 または こう
 salawât toumon *muxtélif*. aí. úmon bí ámulu
 お祈り 彼らの 違う はい 彼ら TMA する
 išara-selib, al hú kída, nína bí ámulu dé.
 十字の印 関係節 それ こう 私達 TMA する これ
 lakín protestânt dé mâ bi sówi.
 しかし 新教 この 否定 TMA する
 úmon bí báda salawât toumon tuwáli.
 彼ら TMA 始める お祈り 彼らの すぐに

「私は旧教[徒]です。そして旧教徒たちは新教徒等々とは違った祈り方をします。彼らの祈り方は違うのです。彼ら (旧教徒) はこのように十字を切ります。私たちはこうします。しかし、新教[徒]はしません。彼らはすぐ祈りを始めます。」

筆者による観察の結果、M 氏とジュバ生え抜きの話者とは、特に JA の語彙知識に差があった。筆者は M 氏がジュバの JA 話者が知る putuku「(食用の) 牛の足」、potapóta「ぬかるみ」、lebenlében「トウダイグサ」等の語彙を知らず、ジュバ生え抜きの JA 話者達との会話によりこれらの語彙を習得したことを確認した。なお、ジュバ生え抜きの JA 話者にとっては、M 氏の変種のほうがより P 氏と比べて JA 的であると見なされていた。

参考文献・参考ウェブサイト

- Abu-Manga, Al-Amin (2009) “Sudan”, In Versteegh a.o. (eds.) *The Encyclopedia of Arabic Language and Linguistics. Vol. IV*. Leiden: Brill. 375–381.
- Amery, H. F. S. (1905) *English-Arabic Vocabulary for the Use of Officials in the Anglo-Egyptian Sudan*. Cairo: Al-Mokattam Printing House.
- Bergman, Elizabeth M. (2008) “Jargon”, In Kees Versteegh a.o. (eds.) *Encyclopaedia of Arabic Language and Linguistics. Vol. II*. Leiden: Brill. 468–472.
- Chol, Bol Deng (2005) *Lahja Jūbā al-‘Arabīya*. Al-Khartūm: al-Dār al-Sūdānīya li al-Kutub. (アラビア語文献)
- Dickins, James (2007) “Khartoum Arabic”, In Versteegh a.o. (eds.) *The Encyclopedia of Arabic Language and Linguistics. Vol. II*. Leiden: Brill. 559–571.
- Eisele, John (2008) “Slang”, In Kees Versteegh a.o. (eds.) *Encyclopaedia of Arabic Language and Linguistics. Vol. IV*. Leiden: Brill. 251–259.
- Hassanein, Ahmad Taher (2009) “Youth Speech”, In Kees Versteegh a.o. (eds.) *Encyclopaedia of Arabic Language and Linguistics. Vol. IV*. Leiden: Brill. 764–767.
- Heine, B. (1982) *The Nubi Language of Kibera: An Arabic Creole*. Berlin: Dietrich Reimer.
- Hillelson, S. (1925) *Sudan Arabic: English-Arabic Vocabulary*. London: The Sudan Government.
- Mahmud, Ushari Ahmad (1979) *Linguistic Variation and Change in the Aspectual System of Juba Arabic*. Washington, D.C: Georgetown University Press.
- Mahmud, Ushari Ahmad. (1983) *Arabic in the Sudan: History and the Spread of a Pidgin-Creole*. Khartoum: FAL Advertising and Print. Co.
- Manfredi, Stefano (2008) “Rendók: a Youth Secret Language in Sudan”, *Estudios de Dialectología Norteafricana y Andalucí*. 12: 113–129.
- Miller, Catherine (2004) “Un parler ‘argotique’ à Juba, Sud Sudan”, In Caubet et al. (eds.) *Sociolinguistique urbaine, parlars jeunes ici et là-bas*. Paris: Harmattan. 69–90.
- Miller, C. & A. Abu-Manga (1992) *Language Change and National Integration: Rural Migrants in Khartoum*. Khartoum: Khartoum University Press.
- Owens, Jonathan (1977) *Aspects of Nubi Grammar*. London University: Ph.D. thesis.
- Philips, J. E. (1983) “African Smokings and Pipes”, *Journal of African History*. 24: 303–319.
- Rizk, Sherin (2007) “The language of Cairo's young university students”, In Catherine Miller et al. (eds.) *Arabic in the City: Issues in dialect contact and language variation*. London and New York: Routledge. 291–308.
- Spagnolo, Lorenzo M. (1960) *Bari English Italian Dictionary*. Verona: Missioni Africane.
- Trimingham, J. S. (1946) *Sudan Colloquial Arabic*. London: Oxford University Press.
- Versteegh, Kees (1993) “Leveling in the Sudan: from Arabic Creole to Arabic Dialect”, *International Journal of the Sociology of Language* 99: 65–79.
- Watson, R. L. & L. B. Ola. (1985) *Juba Arabic for Beginners*. Entebbe: SIL.

- Yokwe, E. M. (1987) *The Tonal Grammar of Bari*. University of Illinois: Ph.D. thesis.
- Youssi, Abderrahim (2008) “Secret Language”, In Kees Versteegh a.o. (eds.) *Encyclopaedia of Arabic Language and Linguistics. Vol. IV*. Leiden: Brill. 156–160
- 東照二 (1997) 『社会言語学入門: 生きた言葉のおもしろさにせまる』 研究社.
- 千田俊太郎 (2010) 「麻雀ジャーゴン試論 - 麻雀ジャーゴン記述と社会方言、集團語の一般論に對する問題提起」 『日本語研究センター報告』 16: 15–36. 大阪樟蔭女子大学日本語研究センター.
- 飛内悠子 (2010) 「いくつもの、そしてひとつの「アラビア語」 - スーダン共和国ハルツームにおける南部人の言語状況についての一考察」 多言語社会研究会第 49 回例会発表資料.
- 仲尾周一郎 (2010) 「ジュバ・アラビア語によるパリ民族の民話」 『地球研言語記述論集』 2: 39–72.
- 仲尾周一郎 (2011) 『ジュバ・アラビア語のプロソディ』 京都大学: 修士論文
- 仲尾周一郎 (forthcoming) 「ジュバ・アラビア語の現在 - 社会言語学的諸相および表記の発達から見るその動態 - 」 『アラブ・イスラーム研究』 9.
- Antiwar Songs. “Kursi wu Gurush” (<http://www.antiwarsongs.org/canzone.php?id=37291&lang=en> 最終アクセス 3/8, 2011)
- Centrelink. *Musaada le zabain ta Centrelink al shan ligo shokol*. (<http://www.centrelink.gov.au/internet/internet.nsf/languages/jz.htm/> 最終アクセス: 10/13, 2007)
- Manitoba Interfaith International Council Inc. *Istigalalia Sex ta Iyal*. (http://www.miic.ca/my_folders/orientation/SEC_Arabi_Juba.pdf 最終アクセス 3/8, 2011)
- 豪州クイーンズランド州教育省. *Barnamij bita Madaresa Rowda le Kul Jana*. (<http://education.qld.gov.au/earlychildhood/pdfs/brochure/kindergarten-program-every-child-juba-arabic.pdf> 最終アクセス 3/8, 2011)
- 豪州ニューサウスウェールズ州 DADHC. *Rabau iyal Sawa sawa (ma'abat)*. (http://www.dadhc.nsw.gov.au/NR/rdonlyres/CF6505B9-5627-4EDA-B460-15DA36C81D55/4967/RKT_Juba_web.pdf 最終アクセス 3/8, 2011)

謝辞

本稿は 2008~2010 年度科学研究費基盤研究 (B) 「アフリカ諸語における統語構造と声調」代表: 梶茂樹 (京都大学) (課題番号 20320059) による補助を受け、筆者が 2009 年 8–9 月、2010 年 8–9 月の計約 2 ヶ月間、ジュバにて行った調査に基づく。この調査をご支援いただいた梶茂樹先生、ジュバでインフォーマントとして協力して下さったパリ民族 (Päri)、テネット民族 (Tenet) の皆様に感謝致します。また、本稿執筆の機会やコメントを頂いた言語研究会メンバーの皆様、特に読み合わせにてご協力頂いた千田俊太郎先生、白田理人氏、およびハルツームでの南部スーダン人の言語使用等についてコメントを頂いた飛内悠子氏にお礼申し上げます。